第三幕で喉の渇いたロバート・チルターン卿が，召使いのフィップスに「Hock & Seltzer を持ってくるように」と言いつける。Richmond 行のチュウブに乗る前，滞在していた Cadogan Hotel でちょうどこのカクテルを飲んできた所だったので，舞台が一気に近づいたような感じがした。104年前 Cadogan Hotel の一室で，White Wine と SodaWater のカクテル‘Hock & Seltzer’を飲んでいる時，Wilde は逮捕されたのであった。詩人 Sir John Betjeman は‘*The Arrest of Oscar Wilde at the Cadogan Hotel*’という詩でそのことを歌っている。一室とは女優 Lillie Langtry の豪華な青の間であり（特別の鍵がある），奥の階段は，Langtry の昔の建物へと通じているが一般には使われず，廊下の反対側は‘Lillie Langtry’という名のレストランになっている。

Chelsea の Redcliffe Road に，ロンドンの一つの拠点を置いた年末，入居前の一時的な足場としてこのホテルを選んだのだが，Tite Street 34 の家から近く（そして憧れの Lillie の昔の家ということもあり），Wilde と Cadogan の関係が実感できた。こうしたことを Estate Agent のレディ Cindie Momber に話したところ，実は自分は Lord Alfred Douglas の血をひく者であると言われ驚いた。Douglas の名前は祖母が生きている内は口にするのは御法度だったが，自分は Wilde の作品のあるものは Douglas との関係から生れており，また Wilde にとって大切な存在だったと思うので，いまでは Douglas の血をひくことを恥じていない。美しい画家志望の Cindie の意見に賛成しながら，またもや Wilde を身近に感じた。という Wilde の残り香は，ロンドンの「われわれの世界」にまだ強く漂っているのを実感している。

世紀末女性の変身願望

山　田　　勝
（神戸市外国語大学教授）

(1)　女性の意識変革と社会状況

十九世紀中頃から末期にかけてヨーロッパを駆けめぐった「フェミニズム」には種々雑多な要因があったように思える。それはかならずしも，女性自身の心身から湧き上がってきたものとは言いきれない。当然，人間の平等意識がその根底に流れているものの，男性側の「スノビズム」にも起因していた。

スノビズムとは，貴族にとって変わって，実質的権力を握ったブルジョワ階級（プチ・

ブルも含む）が産み出した社会現象である。フランス革命と産業革命は，さまざまな社会的，精神的構造を変化させたことは既成事実となっているが，特に興味深い点は，新権力者階級となったブルジョワたちが，旧権力者である貴族たちの誤ちを繰り返そうとしなかった点である。マリー・アントワネットの華麗な生活様式が民衆の反感をかい，それが起爆剤となって，あの大革命が起きたわけであるが，ブルジョワたちは勝ち取った権力と地位を保全するために，細心の注意を払った。自から課した厳しい精神主義（ピューリタニズム）や盛んな慈善活動などは，その端的な例と言っていい。しかしそれは保身のための偽善行為にすぎなかった。

時代の権力者は常に旧権力者の生活様式を憧れ，真似たがるものである。ブルジョワたちは用心しながらも，貴族の生活様式を採用したいという潜在的願望を常に抱いていた。娘の教育を例にとってみても，彼らの願望は明確に察知される。昔は娘の花嫁修業として「刺繍」，「外国語」，「楽器（ハープ）」程度で十分であったものが，テニスや乗馬といったスポーツや文学と芸術を理解する能力，それに舞踏会で華やかに存在を誇示できる社交ダンス（ワルツが中心）などが，世紀末の中流階級女性の必要条件となってきたのである。これはまさに貴族の生活様式の模倣と言ってよい。

流行（ファッション）を創出するのがダンディーであり，流行を真似るのがスノッブである。その意味での彼らブルジョワたちのスノビズムは女性の意識変革に大きな影響を及ぼしたと言える。

(2)　焦燥と仮面

女性の地位向上と自立，それ自体は結構なことであり，自然のなりゆきでもある。しかし時代の転換期には，かならず軋轢が産まれるものである。急激な価値観の変化に追いていけない人々，ストレスや焦燥を感じる人々も多くいた筈である。以前のように，宗教心と既成道徳に従って，単純明解に生きていた女性群も，女性のアイデンティティーを探ろうとするようになる。内に潜んだ自我の探索がそれだ。隠れたる自我の発見は，人間性の悪の一面の発見につながる。即成道徳を除外して，純粋に浄化された様式で自我の発見を試みるならば，それは当然の結果なのである。

自我発見意識とその結果が「自然であった筈の自分」が単なる「仮面をつけた自分」ではなかったのか，という認識とかかわりを持つことになる。仮面を剝がした自分，もしくは新しい仮面をつけた自分には，驚くほどの醜怪さや美しさがあることを知るかもしれない。

こうした要素と，ダーウィンの進化論に代表される科学の進展に伴うキリスト教への疑問が結びついて，女性の「精神的冒険」が始まるのである。「変身への願望」がそれである。この精神現象の変化が，世紀末文学のモチーフとして大きく取り上げられることになった。*The Savoy* に発表された O. Shakespeare の『美女の時間』(*Beauty's Hour*) や *The Yellow Book* に出る Evelyn Sharp の『もう一人のアンナ』(*The Other Anna*) や『うす茶色の服を着てみても』(*In Dull Brown*) などは，女性の変身願望をテーマにしたものであるが，これらは比較的明るいもので，それほど重圧感のない作品の部類に属する。一方，Netta Syrett の書いた『文通』(*A Correspondence*) や『心からの願い』(*Thy Heart's Desire*) などは同一のテーマを扱っているものの，その内容は世紀末の不毛と衰退を訴えたものとなっている。

イギリスの世紀末文学よりもさらに過激なものにしたのは，フランスの世紀末作家である。仮面の本質を追い続けたジャン・ロラン，それにマルセル・シオブ，オクターブ・ミルボーなどの作品も，変身の究極であると言える。また，「高級娼婦」をテーマとして持ち出したユーグ・ルベルの作品や「泥棒」をテーマとしたジョルジュ・ダリアンの作品も捨てがたい。紙数がないので詳しく書けないが詳細については今秋公刊することになるので，それをお読み願えればと思っている。

オスカー・ワイルドのウィット

木 村 克 彦
（作新学院大学専任講師）

ワイルドは，自己の才能に惚れたナルシスであった。しかし同時に，自己の宿命を厭うたキャリバンでもあった。

ワイルドの才能には，よくものの見える〈心眼〉というものがあった。しかし〈肉眼〉のみの浅薄さの魔力をも，ワイルドは知っていたであろう。「浅薄な者だけが自分を知っている」（『警句集』）ワイルドは，決まり文句をひっくり返し社会通念の盲点を突くが，ここで傾注すべきは，ワイルドが決まり文句をひっくり返したということよりも，決まり文句は**ひっくり返せる**ということだ。また，ワイルドの逆説すら，その逆も可能であったりする。故に私たちは，彼の逆説を通して，この世には万人を代入し得る〈公式〉などないということを認識できよう。Richard Ellmann も言う。"His paradoxes would be an insistent reminder of what lay behind the accepted or conventional." 人は当然，過ちを犯すが，当然のごとく犯された過ちほど気付かれぬもので，それも共通な過ちであれば尚更お互い気付くまい。

因襲的な型にはまってしまえば，迷うこともなく，幸福であろう。ワイルドを迷わせたものは，彼のウィットの才に他ならぬ。"I have nothing to declare except my gen-